秋田県立博物館研究報告第41号　87～100ページ　2016年３月
Ann. Rep. Akita Pref. Mus., No.41, 87-100, March 2016

企画展を通した常設展示資料の再評価の試み

－「石斧のある世界」展の開催とその意義－

吉　川　耕太郎 *

はじめに―学芸サイドと来館者の隔たり―

当館考古部門では重要文化財として秋田県東成瀬村上掵（うわはば）遺跡出土の大型磨製石斧４点（写真１：昭和63年指定・縄文時代前期）と同潟上市狐森遺跡出土の人面付環状注口土器（写真２：昭和53年指定・縄文時代後期）が所蔵品にある。

写真１　大型磨製石斧

写真２　人面付環状注口土器

これらは平成16年度の当館リニューアル以降、シンボル展示として人文展示室の中央を走るメインストリートに展示されている。なかでも大型磨製石斧は入り口正面に展示されており、入室者はまず真っ先にこれらの石斧を目にするような配置となっている（写真３）。

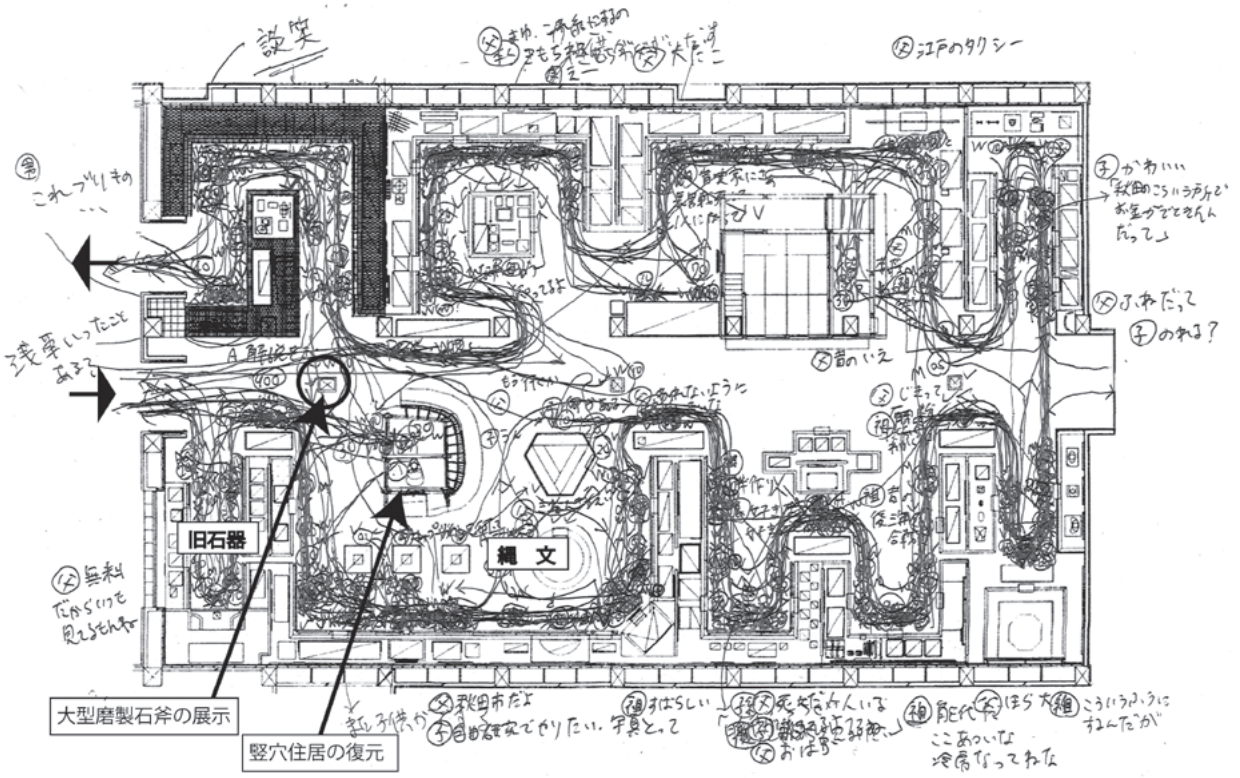
筆者は、平成22年度に当館学芸職員として配属となって以降、人文展示室考古展示での観覧者の動線を不定期ではあるが観察・記録してきた。

写真３　人文展示室入り口

そこでもっとも気になったのは、展示企画者が意図したとおりに観覧者は展示品に注意を払っていないのではないかという点である。その最たるものが大型磨製石斧であった。観覧者の動線は入室後、すぐに人文展示室右側の旧石器コーナーに曲がり、壁沿いに展示品を見て、縄文コーナーにくると、左手にある大型磨製石斧より目の前の復元竪穴住居に目を奪われてしまう。そして、そのまま右へ壁沿いに順路を進むのである。第１図は当館職員が2014年８月に博物館実習生とともに調査した人文展示室内の動線であり、観覧者は大型磨製石斧よりも、竪穴住居に向かっている動きがよく現れている。

ところで、来館者の声によくあるものとして「ここはいつ来ても常設展示が変わらないね。」というものがある。常設展示は変わらないから常設展示なのであるが、しかし、果たしてそう開き直ってもよいのであろうか。学問の世界では日進月歩の勢いで新しい研究成果が得られている。博物館はそうした最新成果を慎重に吟味の上、反映させていくのも責務と考える。常設された展示品自体を大幅に変えることはできないが、ソフトウェアとしての情報を刷新していくことは可能である。そこで筆者は情報カードを作成し、人文展示室内に配置するとともに、「展示品ワンポイント解

*秋田県立博物館



第１図　人文展示室での来館者の動線調査

説集」を作り、解説員に渡すなどしている。さらに、学芸職員自らが来館者に展示解説を行う「ミュージアムトーク」を企画、毎月複数回実施してきた。参加者は平成23年度167人（46回開催）、平成24年度229人（71回開催）、平成25年度907人（89回開催）、平成26年度233人（24回開催）であり、「観ているだけではわからないが、専門家の熱い思いとともに展示品を見るととても分かりやすい」と非常に好評を博している。

そのミュージアムトーク中、筆者は当然のごとく、例の「大型磨製石斧」の解説をする。「こちらは東成瀬村で発見された縄文時代の大型磨製石斧でして・・・」と話し出すと、大多数の参加者からは「こんな立派なのがあったなんて、今まで気づかなかった」との声が聞かれるのである。先の動線観察の結果と調和的である。このように展示企画者（学芸サイド）と来館者とには隔たりがあるのが常である。これは、たとえば展示資料の見方やそこから学んでほしいことなど、あらゆる場面で問題となり、博物館展示に携わる者は常にそうした隔たりを意識しながら業務に取り組まなければならない。

さて、この大型磨製石斧は、その大きさもさることながら、４本が刃先を揃えて縄文集落の東端の地中に「埋納」された状態で発見されたことがより考古学的に重要であった（庄内1987）。また、観覧者も口々に話すように、非常に美しく仕上げられており、美術的観点からも非常に価値が高いと筆者は思っている（註１）。こうした秋田県の財産をより広く県民に伝えたい、さらには、「なぜこうした大型磨製石斧が作られたのか」という根本的な問いをしてみたい、との思いが強くなり、企画展示を通して、大型磨製石斧の再評価（註２）と普及を試みることとなった。小稿は、そうした中で立案された企画展の概要を紹介し、地域博物館が所蔵する資料の再評価と、企画展開催の意義について考察することを目的とする。次章ではどのような展示が実施されたのかイメージを共有するため、冗長になるが、展示の詳細について報告する。

１．展示の概要

当館では常設展示のほか、企画展示室で年間３回の企画展と１回の特別展を開催している。特別

展は当館唯一の有料展となるが、企画展は無料となっている。ここでは前述の目的意識に基づいて、平成27年4月25日（土）から6月21日（日）までの約2か月間開催した企画展「石斧のある世界」について述べる。

前述したように当館では重要文化財である大型磨製石斧4点を所蔵しており、常設の人文展示室にて一般公開している。これらの大型磨製石斧は秋田県東成瀬村上掄遺跡から昭和40年に発見されたもので、今年度は発見から半世紀の節目となる年であったため、この大型磨製石斧が有する価値を再評価し、あらためて広く県民に伝えることを目的として本企画展を立案した。

本資料は県民の財産であるため、考古学ファン向けに対象を限定することなく、考古学に関心が高くない老若男女でも観てみたいと思える展示、観た後に得られるものがあったと思える展示を目指すこととした。

1）展示の趣旨

以下が展示趣旨である。

「秋田県東成瀬村上掄遺跡（縄文時代前期後半・今から約5,500年前）で出土した大型磨製石斧の重要性とその価値を広く県民に紹介することを第一の目的とする。

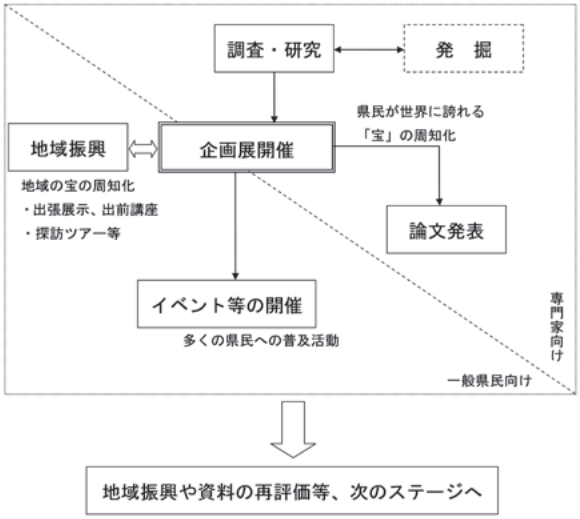
その目的を達成するために、人と石斧の歴史について全体的な理解を促す。具体的には旧石器時代から縄文時代、そして民族例での石斧の役割を時代毎・テーマ別に示し、石斧が人類の文化を築くうえで重要な道具であったことと、それゆえに石斧がもった文化的・社会的意義について、近年の考古学的研究の成果と当館で実施した調査研究の成果を理解してもらう。

そうした人と石斧の関わり、『石斧史』の全体を俯瞰しながら、縄文時代において巨大な石斧が集中的に分布する本県を含んだ北日本の地域性について、大陸との関連もあわせた歴史的な評価を紹介する。とくに、従来は南に向きがちな視点を、北方世界に向けることによって、新しい秋田像を描くことができる。本展示は、きたるリニューアルに向けての準備も兼ねる。

観覧者には馴染みのないと思われる『石斧』を通して、新しい世界や秋田像が垣間見えることを実感してもらい、『地域』を学ぶ機会としたい。また、磨製石斧の美的側面についても楽しんで鑑賞してもらいたい。」（企画書からの引用）

今回の展示では、これまでの考古学的知見を踏まえ、研究面でも新たな価値を生み出すとともに、考古学に対して興味が高くない層にも足を運んでもらい、楽しめるような展示を目指すこととした。資料の価値を広めるにあたって、発見地である地元との連携は不可欠で、大型磨製石斧が出土した東成瀬村の地域振興へと結びつけることも考えた。

企画展は往々にして、学芸職員の研究成果の到達点として位置づけられ、いわば学芸サイドにとってゴールとなることが多いように思われる。本展示はそうしたゴールに位置付けるのではなく、収蔵資料の再評価と普及、研究面と普及面での新たなステージへの「スタート地点」として位置付けることとした（第2図）。



第2図　石斧のある世界展の位置づけ

ところで、考古学はいかに現代社会に関わることができるか、それをいかに地域博物館として実現できるかについて、よく問われるところである（木村 2001）。筆者は、東日本大震災とそれに伴う原子力発電所の事故などを経て東北地方で考古学を研究する意味を常々自問してきたが、今のところ、「自然」－「ヒト・人」－「道具・技術」の三者の関係やバランスを歴史的に読み解いていくなかで現代を見つめ直し、未来を展望することによって、考古学は社会に大きく寄与できるものと考えるに至っている。本企画展でも上記の目的の

底流にはそうした想いがある。後述するように、大自然の中に足を踏み入れた人類が、開拓のために手にした道具が「磨製石斧」であり、磨製石斧を自然と人との関わりの中で見つめ直すという観点である。

なお、当初予算にはなかったが、「展示パンフレット」としてA4判・8頁・4色刷の冊子を4,000部製作することとした。

2）展示概要

①各章の構成

はじめに、「石斧展の楽しみ方」と題して、展示を見る際の着眼点や楽しみ方のコツ、想像力を用いながら観てもらいたいことなどを解説するパネルと石斧の複製品を設置。これは考古学ファンではない観覧者の来室を意識してのことである。

最初に、人類が初めて手にした道具である前期旧石器時代のハンドアックスを象徴的に展示。そして、日本旧石器時代の石斧が世界的に珍しい「磨製」であることを紹介し、その用途・役割について、大型獣狩猟に伴う解体、人類拡散期における「舟」製造などに効力を発揮し（安蒜2013）、姶良丹沢火山灰降灰前後（今から約30,000年前）以降、大型獣の減少と人類拡散の終了とともにいったん消滅することを資料とパネルにより解説（第1章）。

本展のメインである縄文時代の石斧展示は、大きく2つに区分した。一つは解説に重点を置いた展示（第2～4章）で、おもに秋田県で出土した縄文時代の石斧について、石材・種類・製作技法・機能（用途）とテーマ毎に紹介し、その多様性について解説する。もう一つは美的側面・視覚的インパクトに重点を置いた展示（第5・6章）で、実用品としてだけではなく、祭祀・儀礼の場面で果たした石斧の役割について、来館者が強く印象に残るような展示手法（レイアウト・照明等）を図る。そのなかで、秋田県東成瀬村上掄遺跡出土の大型磨製石斧を代表として、北日本は長さ30㎝を超える巨大な石斧が分布するという地域的な特徴があることを示し、その背景に大陸文化との北回りの接触がある可能性を解説。第6章が本展で最も中核となる展示である。

最後に、民族事例を参考展示することによって（第7章）、考古資料の理解の一助とする。

本展示の焦点は本県出土の重要文化財「大型磨製石斧」が有する価値を理解してもらうことであり、すべてのコーナー展示がそこの1点に集約されるストーリー展開、展示構成とした。

②資料の主な借用先

以上の展示を達成するために、東北地方を中心に、青森県立郷土館、青森県埋蔵文化財調査センター、秋田県埋蔵文化財センター、秋田市教育委員会、五所川原市教育委員会、小松クラフトスペース、首都大学東京考古学研究室、竹中大工道具館、南山大学人類学博物館、明治大学博物館、盛岡市教育委員会の各機関や個人の方から資料を借用した。

とくに、長年にわたり石斧の製作・使用実験により多くの新知見を得ている首都大学東京考古学研究室教授の山田昌久氏には、本展示を開催するにあたって有益な助言を数多く賜り、実験資料や映像もお貸しいただいた。

③各章の展示内容とねらい

写真4　企画展示室入り口

はじめに　～石斧展の楽しみ方～

導入部では石斧とは何かについての簡潔な説明と、考古学展示の楽しみ方を紹介。

第1章　「フロンティアたちの石斧　～日本列島移住期の石斧とそのナゾ～」

旧石器時代の局部磨製石斧とその用途について、木材伐採具説のほか、大型動物解体具説、落とし穴掘削具説、丸木舟製作具説を紹介。また、磨製石器が旧石器時代から出現した日本列島とオーストラリアの固有性も解説。

第2章　「新たな時代を切り拓く石斧　～縄文時代の石斧とその種類～」

写真５　第１章でスタンプラリーを楽しむ観覧者

秋田県内から出土した資料を中心に、打製石斧・磨製石斧の違いと、その中での細分形態の違いを網羅的に解説。また、打製石斧系列は縄文時代を通して実用品であるが、磨製石斧系列は大型磨製石斧のほか環状石斧、独鈷石など、非実用品に派生するあり方を新たに提示。

第３章「石斧をつくる」

秋田県や青森県の石斧製作遺跡出土品や復元品から、石斧の製作工程を紹介。とくに青森県における擦切技法による磨製石斧の製作遺跡を重点的に解説。

第４章「石斧をつかう～日常のなかの石斧～」

縄文時代の石斧は木材伐採、竪穴住居等の掘削に使われたほか、後晩期には畑作関連道具と推測される秋田県に特徴的な「虫内型打製石斧」（吉川 2012）があることを紹介し、機能的多様性を解説。また、伐採の対象となったクリの木の重要性も示す。

写真６　第２～４章の展示風景

コラム展示１「石斧の実験考古学」

首都大学東京考古学研究室で長年実施されている石斧の製作と使用に関わる実験考古学等（山田 2014、工藤他 2014）を紹介。石斧（複製品）のハンズオン展示も併設。

コラム展示２「縄文農耕論と打製石斧」

土掘り具としての打製石斧と近年進展している土器圧痕レプリカ法の成果（小畑 2011、工藤編 2014）について、学史的な縄文農耕論とあわせて紹介。

コラム展示３「木と縄文人」

青森県三内丸山遺跡の調査研究成果から縄文時代の人々によるクリの栽培・管理が言及されているが（工藤編前掲）、そうした自然への働きかけ、縄文人の利用した木や木製品などを紹介。

写真７　コラム展示コーナー

第５章「祈りと象徴～儀礼のなかの石斧～」

縄文時代の磨製石斧は象徴的な意味合いでも用いられたことを、とくに円筒下層式期の土坑墓の副葬品や儀礼的な出土状態を示す資料などから解説。

写真８　第５章の展示風景

第６章「巨大石斧の世界」

縄文時代の大型磨製石斧は擦切技法が中心で北

写真９　北日本の大型磨製石斧の展示

日本に多く分布することを紹介。なかでも上掃遺跡出土品はその大きさだけでなく、帰属時期や特殊な出土状態が推定されている点で重要であることを示す。また、こうした大型品を含む北東北地方の磨製石斧に使われる石材として、北陸地方の透閃石岩や北海道日高地方の緑色岩（アオトラ石）が多用され広域に分布していることも紹介。

第７章　生きている石斧、消えつつある石斧

パプア・ニューギニアの民族事例から利器、シンボルとしての磨製石斧のあり方を紹介。磨製で、なかには擦切技法が認められるものもある点や緑色系の石材を用いる点、薄く仕上げられる点など縄文時代の大型磨製石斧との共通点も示す。

写真 10　第７章の展示風景

２．展示を補完する企画展関連事業

一般に展示は展示品と解説パネルで構成される。展示品が観覧者に身近なもの、基礎的な知識のあるものであればあるほど、展示企画者と観覧者の隔たりは少ないといえる。たとえば、近年流行している「昭和」をテーマとした展示は集客効果もあり、展示品そのものを理解してもらうという点では展示企画者はさほど労しないだろう。逆に、観覧者の生活の舞台から時空間的に遠い位置にある資料や異なった生活・文化様式の中にあった資料は、ただその資料を見ていても理解できるというものではなく、観覧者側にそれ相応の基礎知識がなければならない。その最たるものの一つが考古学系の展示である。とくに現代と大きくライフスタイル（生活様式・生業）の異なる旧石器時代や縄文時代の展示では、相当に想像力を働かせなければ、展示品の背後にある世界に思いをはせることは困難である。このため、考古学系の展示では解説パネルが増える傾向にある。たとえば、展示キャプションに「炭火アイロン」とあれば、それがどういうものであるのか観覧者は想像できるが、「独鈷石」というキャプションがあっても、それが何であるのか一般には理解できないだろう。もしくは「独鈷」が密教の仏具という知識があれば、観覧者はかえって混乱する恐れもある。かといって、個々の展示品に対する説明文を増やせば、観覧者に苦痛を強いることになりかねない。

資料の一点一点がそうした問題をはらむため、展示全体の意図を理解してもらうとなると、展示品と解説パネルだけでは当然限界がある。このために、通常、企画展では展示に関連する普及事業を合わせて開催している。本展では学芸と観覧者の隔たりを狭める試みとして次にあげる事業を実施した。

１）体験イベント「ミニ石斧をつくろう」

磨製石斧のミニチュアをつくる企画である。ゴールデンウィークということもあり、定員を大幅に上回る参加者があり好評を博した。通常、磨きやすい滑石と紙やすりで作るというイベントを見かけるが、当館では本物志向にこだわり、実際に利用された磨製石斧の材料に近い緑色凝灰岩と安山岩・砂岩などの砥石を県内の河川から採集して開催した。最初に展示解説を行い、そのあとに磨製石斧の製作に取りかかる。参加者は石と石をこすり合わせて磨けるということに、大人も子供も一様に驚いていた。石器専門家からすれば当たり前のように思っていたことも、参加者が驚いていたことにかえって新鮮な印象を持った。こうし

た参加者からのフィードバックは、展示解説や次回の展示を企画する際に、観覧者側に立つ展示によって「隔たり」を縮める時に非常に有益な経験となる。

2）考古学レクチャー「日本最大の石斧のナゾに迫る」

展示だけでは伝えきれないことを講座形式で補完するということはよくあるが、本展でも同様に考古学レクチャーとして開催した。当館で実施した講座に加え、アウトリーチとして秋田県生涯学習センターでも行った。講座ではパソコンを用い、展示では表現できない映像効果によって展示企図の理解を深めてもらうこととした。

3）探訪ツアー「巨大石斧の出土地を訪ねる」

バスをチャーターし、大型磨製石斧が出土した上掵遺跡の発掘調査体験ツアーを東成瀬村教育委員会の共催のもとに実施した。ツアーでは発掘体験だけではなく、上掵遺跡のある東成瀬村の自然と文化、地理を体感するために、地元ガイドの協力のもとに名所旧跡を訪ねる内容を取り込んだ。なぜこの地に上掵遺跡という大きな縄文時代の集落が営まれたか、そしてこの地はどのような歴史を歩んだのかを理解するのに役立てられた。とくに上掵遺跡は宮城県を中心とした大木式土器文化圏にある。東成瀬村と宮城県を結ぶ連絡路として仙北街道があるが、古代にさかのぼるといわれるその街道は江戸時代に活発に利用されている。この仙北街道上には岩手県奥州市下嵐江Ⅰ・Ⅱ遺跡があるのだが、そこから出土した旧石器時代の石槍には多くの秋田県男鹿半島産黒曜石が利用されていることが近年明らかになっており（岩手県文化振興事業団 2013、吉川 2014）、奥羽山脈をまたぐ街道の起源は旧石器時代にまで遡る可能性もある。こうした歴史地理学的な見方は上掵遺跡の理解に非常に役立てられた（註 3）。

写真 11　体験発掘の風景

4）ギャラリートーク

企画展にはギャラリートークがつきものである。本展では会期中５回実施する計画だったが、それ以外にも来館者の入りを見て随時開催した。展示品を前に交わされる観覧者との対話は双方にとって非常に有意義であり、「隔たり」を埋めるもっとも直接的な方法である。この際、注意すべきことはトップダウン方式の展示解説ではなく、あくまで双方向的な「トーク」となることを心がけることである。そうすることにより、観覧者の見方や考え方をこちらも把握することができ、今後の展示に生かすことができよう。

写真 12　ギャラリートーク風景

5）ロビー展示「上掵遺跡の最新発掘成果速報展！」

上掵遺跡は平成 20 年度以降、東成瀬村教育委員会により学術調査が実施されている（東成瀬村教育委員会 2012）。これにより遺跡の範囲や中心部が把握され、その時期も縄文時代前期後半の大木５・６式期をメインとすることなどが明らかになってきた。本展に合わせてそうした近年の発掘調査成果を博物館ロビーにて展示した。結果的に、企画展以外の話題作りにもなり、さらに前述したバスツアーの体験発掘で出土した資料も展示することにより、ツアー参加者も再度来館して展示品を改めて観覧するという動きを生み出すことができた。

6）東成瀬村教育委員会主催事業

以上の他に、大型磨製石斧が出土した東成瀬村教育委員会が主催となったイベントも合わせて実施された。

その一つとして、村主催のバスツアーが開催された。これは「石斧のある世界」展を見学するというもので、展示担当職員より展示解説を行った。また、当館で実施した石斧づくりが東成瀬村の小中学生を対象に実施された。

このほかに、村教委が実施した上掵遺跡の発掘調査に調査指導として形で当館も参加することができた。

3．考古学ファン以外への働きかけの試み

1）ポスターデザイン

本企画展は大型磨製石斧の価値を広く県民に伝えることが目的であるため、従来の考古学ファンはもとより、さらに広い層に観覧してもらうことを目標に掲げた。企画展に興味を持つかどうかのきっかけの一つとして、ポスター・チラシのデザイン性が問われると考え、これまでの当館で開催してきた考古系展示とは一線を画したデザインの追及を行った。

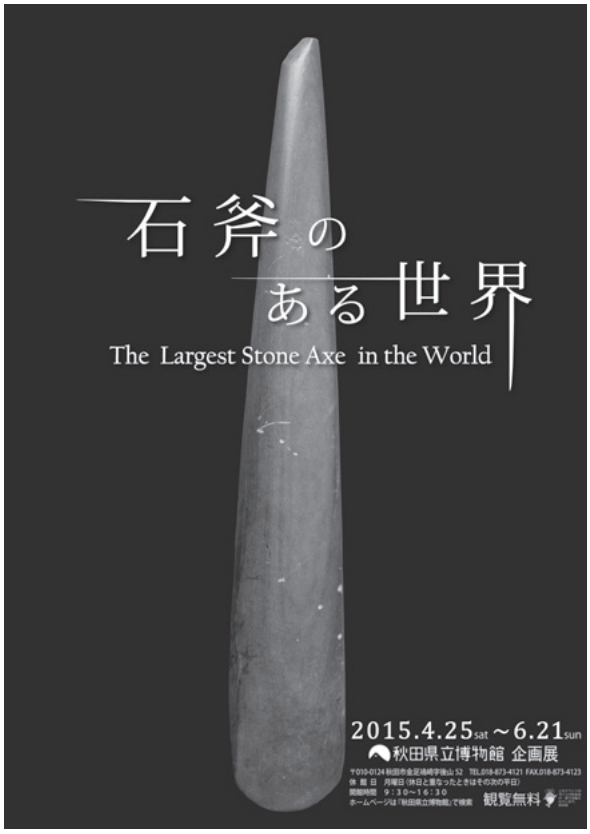


写真 13　ポスターのデザイン

筆者は上掵遺跡出土の大型磨製石斧に関して、そのサイズや特殊な出土状況などの考古学的価値のみならず、美的側面も重視している。今回は、従来あまり言及されてこなかった大型磨製石斧の美しさに注目してもらいたいとの観点から、最終的に写真 13 のデザインに決定した。４本の大型磨製石斧の中で最大のもののみを取り上げ、なるべく余計な情報が目に入らないように留意したデザインである。このデザインは観覧者や関係者から好評を得、考古ファン以外の方々の来館を促すことに一定の成果があったことが後述のアンケートや会場での聞き取り調査などから分かる。

2）小中高生への働きかけ

大型磨製石斧の価値を県内の小中高生にも知ってもらいたいとの思いから、当館学習振興班が「スタンプラリー」を企画した。これは、スタンプラリー用のシートを作成し、本企画展示室内に３つのスタンプコーナーを設けて展示室を巡ってもらい、スタンプを全て押したらシールをプレゼントするというものであった。参加者は小学生以下が多くを占めたが、休日は展示室内が子どもたちで賑わいを見せ、後述のアンケート結果からも一定の成果があった。スタンプラリーで留意したことは、単にスタンプを押すのではなく、最低限展示でおさえてほしい箇所にスタンプを設置し、考えたり体感したりしてスタンプを押すという仕組みにした点である。

また、セカンドスクール的利用において県内外の小中高生に見学してもらい、幼稚園児にも観覧

写真 14　幼稚園児への解説

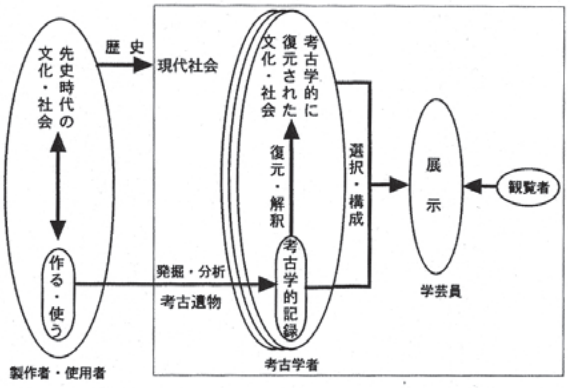
してもらう機会を作った。期間中、幼稚園児257名、小学生542名、中学生673名、高校生240名の合計1,712名が観覧した。

石斧という専門的なテーマを幼稚園児に観覧させても分からないのではないかという懸念もあったが、実際に行ってみると、園児なりの感動や学びがあった。解説において、土掘り具としての有肩打製石斧を提示し、「これは何の道具と思うかな？」と質問すると、「スコップに似ている！」との答えが返ってきた。これには意外だったが、「そう！今でいうスコップ。昔の人は石でスコップを作ったんだけど、形は何千年も変わらないんだね」と話しながらも、園児の感性に驚く場面もあった。こうしたやり取りを大人向けのギャラリートークでも紹介することによって、大人もより関心が高まるという効果を生み出すことができた。幼稚園児を観覧させるかどうかは館内でも賛否両論あったが、筆者はこうした体験からも、少なくとも考古系の展示には、原則年齢制限を設ける必要はないと考えている。

４．考古資料展示の特性と工夫

一般的に考古資料は小さいものが多い。当館企画展示室は691㎡あり、石斧だけで展示室が埋まるのかと企画立案当初から懸念された。とくに石器については「第一に展示資料が全体に小さく展示ケース内で立体感に欠け、資料そのものが観覧者に驚きや感動を働きかけることはあまり期待できない。また、それに関連してどうしても展示構成が解説的になり、文字パネルやパネル類が煩雑になる傾向がある。（中略）展示構成の全体のプロットや学芸員の資料に対する選択・解釈における綿密さと大胆さ、学芸員の研究者としての程度が厳しく問われることになる」（島田 1997；44 頁）のである。本企画展示室におけるこうした経験は筆者もかつて担当した別の企画展で経験した（吉川 2013）。

また、考古展示の特性として意識しなければならないのは、様々な「階層」の人が介在している点である。すなわち、考古資料の製作者・使用者、考古学者、学芸員、観覧者であり（島田前掲；第３図）、それぞれの間には「溝」が存在する。展示に関しては、展示を企画する学芸員が前二者と観覧者の間にいかに意識的に立てるかが重要で、「伝言ゲーム」のような危険性をはらんでいることは常に意識せねばなるまい。



第３図　考古資料の来歴に関わるヒトビト（島田 1997）

ところで、本展示の目的でもある「磨製石斧の美しさ」を観覧者に感じ取ってもらうというのは、石器展示にとってある種の挑戦であった。背景となる展示台の色調の選定とスポットライトにより効果的に磨製石斧の光沢面が映えるように試みるとともに、第６章ではLEDテープを新たに導入し、展示資料を際立たせた。また、考古資料は、前述のようにそれのみでは語ることはなく、その背後にある歴史像や人々について観覧者がイメージすることは難しいため、イラストを作成し、煩雑にならないようレイアウトに留意しながら解説パネルを展示した。立体感のない石斧では展示ケース内の壁面が大きく空いてしまうため、Ａ１版やＢ２版のイラストパネルを用いることによってケース内のバランスを安定させ、かつイラストは展示の雰囲気を落ち着かせる淡彩画風となるようにパソコン上で彩色した。

その他、磨製石斧が縄文時代の生活必需品であるがゆえに大量に生産・消費された様を視覚的に伝えるために、第２章では集合露出展示を行い、インパクトを狙った。

以上のような工夫をもってしても石斧だけでは食傷気味になる恐れもあったため、縄文人が踏み込んだ森の象徴として、展示室中央にブナの大木を展示することにより、展示にアクセントをつけるとともに、縄文人の世界に対してイメージを持つことができるようにした。

５．観覧者の反応からみた本展の特徴

展示の際に学芸サイドがストレスを感じることの一つに、こちらの企画意図がどの程度観覧者に伝わっているのかということが直接的には分かりにくいという点がある。そのためにアンケートなどを実施するが、アンケートを記入する観覧者は高く評価するか苦情かの両極端になる場合が多いため、観覧者全体の感想を網羅的に反映しているとは考えにくい面がある。このため、観覧者がこちらの展示意図に即した反応をしているかどうかを検証するには、実際に会場で観覧者を観察するということも必要になってくる（フォーク他1996）。

１）アンケートと会場の声から

いささか冗長になるが、展示企図が伝わったかどうかを見るために、観覧者の声を次に紹介する。アンケートの自由記述欄では、プラス面としては、「見たことのない石がたくさんあってきれいだったし、とても印象に残りました。栗の木を切っているところがすごかったです」（10代以下男性）、「スタンプラリー、楽しかった～」（10代以下男性）、「石斧がとても大きくてびっくりしました」（10代以下男性）、「説明がくわしくておもしろかったです」（10代以下・女性）、「大きな石斧におどろきました」（10代以下女性）、「巨大石斧の展示がワクワクしました。自然と人間の関係について考えさせられる展示でした」（20代女性）、「博物館で製作した大型磨製石斧のレプリカで重さ・大きさが体感できてよかった」（30代男性）、「とても迫力があり、また石斧と人との関わりや存在する意味が深く掘り下げられて大変興味深く勉強になりました」（30代男性）、「昔のたった一つの道具をテーマとした企画であったため、あまり面白いものではないだろうと思っていたが、とても楽しく見ることができた。自分で想像することもでき、大変面白かった」（40代男性）、「旧石器・縄文時代から現代の私たちに感動が届きました。磨製石斧の意味が深く残りました。」（40代女性）、「道具の始まり、人と自然の関わりを感じた企画展でした。案内ポスターもよかった」（50代女性）、「秋田の誇りです」（60代男性）、「よく考えられた、よい展示内容かと存じます。興味深い内容で、かつての考古学少年にはワクワクの時間でありました」（60代男性）、「現代の子どもたちには是非見てほしい」（60代女性）、「生きることの原点を知ることができました。生きる力が湧きました」（70代以上女性）など、様々な観点からの多くの声があった。パンフレットについても高評価であった。

一方、マイナス面としては、「石斧複製品を持てるコーナーのような体験コーナーをもっと増やせば子どもともっと楽しめると思った」（40代女性）、「大型磨製石斧のライトの展示は賛否両論あると思う」（50代女性）、「巨大石斧の置かれた布をもっと立派なものにしてほしかった」（50代女性）など、少数ではあったが、40代以降の女性で、体験コーナーの増設や大型磨製石斧の展示方法についてマイナス評価が集中する傾向にあった。

会場の声としては「大型磨製石斧の展示方法が画期的だ」、「ポスターがすばらしい」、「イラストがわかりやすい」、「儀礼用の石斧はやっぱりきれいだなぁ」、「パンフレットが立派で分かりやすくて嬉しい」といったプラス評価、「照明がところどころ暗い」、「パネルの文字をもう少し大きくしてほしい」などのマイナス評価があり、今回はアンケート結果と大きく変わるところはなかった。また、展示会終了後、来館者から「石斧展で最後に投げかけていた『現代の私たちはどのような“斧”を手にしているのでしょうか』というメッセージについて、いまだに考えさせられている」との声もいただいた。会場ではパネル解説をじっくり見る姿が多く見受けられ、観覧時間が１～３時間以上に及ぶ場合も幾度となく確認できた。

２）年齢構成と男女比

アンケート調査から集計した観覧者の年齢構成は９歳以下（41名；男18・女23）、10代（77名；男40・女37）、20代（19名；男７・女12）、30代（28名；男12・女16）、40代（32名；男15・女17）、50代（33名；男18・女15）、60代（51名；男36・女15）、70代以上（39名；男28・女11）という結果が得られた。通常の考古系展示と比べ、とくに40代以下、女性の割合が高い特徴が指摘できる。

３）観覧のきっかけ

本企画展観覧のきっかけについてもアンケートで尋ねたところ、最も多かったのは「ポスター・

チラシ」(99 名) で、次いで「来館して」(94 名)、「テレビ・ラジオ」(49 名)、「新聞」(43 名)、「知人から」(38 名)、「ホームページ」(31 名)・・・といった順であった。

4）アンケート等の結果から

以上のように、概ね企画意図に沿った観覧者の反応を見て取ることができた。大型磨製石斧の展示手法については展示企画サイドとしても試行的な意味合いがあり、ある意味で予想どおり賛否両論があった。

地方博物館における考古系展示では一般的に年齢構成・男女比は 60 代以上の男性が中心で、かつ 30 ～ 50 代の社会の中核を担う年代は非常に少なくなる傾向にあるが、今回は石斧という考古系展示でもかなり限定的・専門的な内容であったにもかかわらず、30 ～ 50 代の割合が他年代と遜色がなく、しかも 50 代以下で男女比が均等かもしくは女性の方が高い割合になった。考古系、とくに石器の展示では珍しい現象である。ポスターデザインの効果とともに、スタンプラリーの実施による保護者としての観覧も反映していると思われる。

企画展観覧のきっかけについては、従来、「来館して」に次いで「テレビ・ラジオ・新聞」などのマスメディアによる広報が上位になる傾向にあるが、今回は「ポスター・チラシ」がトップになった。配布先を他の企画展ポスターと変えたわけではないので、やはりデザインにより、従来の考古ファン以外をも巻き込むことがきたことの表れであろう。それはアンケートの自由記述欄等からも読み取ることができる。また、観覧者の見学時間が比較的長い傾向にあり、解説パネルや資料をじっくり見ている姿が多々見受けられた。

6．資料の再評価

数多くある縄文時代の石器の中で、利器としての形態を保ったまま大型化、儀器化した主たる石器として磨製石斧がある。同じ石斧に分類される打製石斧はあくまで実用品に徹した。こうした磨製石斧の大型化・儀器化は縄文時代のものだけに限らず、イギリス新石器時代の翡翠製磨製石斧（Macgregor 2012）や有名なパプア・ニューギニアの磨製石斧（佐原 1994）などがある。磨製石斧がなぜそうした道をたどるのかを考えるのは本企画展の一つの重要な要素であった。そして、展示では、伐採具としての磨製石斧が、集落を築く際、自然界に人間界を作り出すための唯一の道具であり、集落の周辺に明るい森林を維持管理するための唯一の道具であったためであるとの見方を結論として示した。少なくとも森林を切り開く必要のある地域では磨製石斧が儀器化するとの考えを提示し、今後多角的に検証していかねばならないが、そうした人類史的観点から当館所蔵の大型磨製石斧を評価した。

さらに実証的な調査研究に関して大きな成果を収めることができた。それは上掄遺跡出土の大型磨製石斧の石材鑑定である。当該磨製石斧は従来、緑色凝灰岩製とされてきた（庄内 1987）。産地は不明であったが、秋田県はグリーンタフ変動地帯に含まれるため遺跡近傍に産地があることが予測される向きもあった。一方、近年、北日本の磨製石斧の石材として北海道日高地方に産する緑色岩（アオトラ石）が注目されている（齋藤他 2006）。本企画展開催にあたって改めて大型磨製石斧 4 点の肉眼観察をすると非常に「アオトラ石」に近いものもあった。このため、中村由克氏による石材鑑定を実施した。その結果、4 点とも「アオトラ石」であるとの結果が出された。その報告については別稿に譲るが（中村・吉川 2016）、産地の限定的な石材が用いられていると判明した意義は非常に大きい。従来は先験的に遺跡周辺で石材の獲得と大型磨製石斧の製作が行われたものと考えられていたが、製品として北海道地方から入ってきた可能性が出てきたのである。これは資料の評価に大きく関わる成果である。さらには本展で展示した青森県や岩手県などで見つかった「緑色凝灰岩製」大型磨製石斧も「アオトラ石」である可能性が生じ、そうだとすれば、北日本に広く分布する大型磨製石斧の石材と製作に関わる研究に一石を投じることになるだろう（註 4）。

また、もう一つは磨製石斧と擦切技法の関わりについてである（吉川 2015）。擦切技法が用いられたことを判断するには石斧に擦り切りによって折り取られた際に生じる段差（バリ）が残ってい

写真 15　大型磨製石斧の擦切痕

るか否かである（写真 15）。擦切技法は緑色岩と強い関連性が認められ、それらの石材によって製作された磨製石斧には擦切痕の残置する割合が相当に高そうな見通しが得られた。筆者は、展示を通して数多くの磨製石斧を調査する過程でこうした擦切痕が残されていることに違和感を覚えた。縄文時代の人々はモノづくりにおいて、単に実用性があればよいというわけではなく、「美」を追求していたことが土器や編組品等の様々な資料からうかがい知ることができ、それは石器についても言えることと筆者は考えている。とくに縄文時代前期、円筒下層式文化圏でよく見られる土坑墓の副葬品となった石槍や石鏃、磨製石斧は、非常に美しく仕上げられている（吉川 2014）。にもかかわらず、磨製石斧には擦切痕が残されているのである。このことはその他の数々の大型磨製石斧についても言える。当時の技術力からすれば擦切痕を除去するのはたやすいことである。実際、実用品の中にはほぼ擦切痕を除去した例も確認はされる。しかし、儀器でこそ除去されるべきと考えるのは現代人ゆえの思考かもしれない。産地や製作地が特定され、その製作技術としての擦切技法も特殊なものとして特定集団により管理されるものと認識されていたと仮定するなら、擦切痕を敢えて残すことが磨製石斧の「ブランド化」に一役買った可能性もあるのではないだろうか。つまり、擦切痕の意図的残置という視点である。これについては今後、調査研究を進めることによってその可能性について検証していきたい。

このほかに、参考資料として展示したパプア・ニューギニアの儀礼用磨製石斧について、南山大学所蔵品を調査した際、縄文時代の大型磨製石斧との共通点を幾つか見いだした。たとえば、①緑色の石材で作られていること、②大形で薄く仕上げられていること、③擦切技法の痕跡をとどめるものが１点確認されたこと、などである。もちろん縄文時代と直接関わりがあるわけではないが、儀礼用の磨製石斧を巡る人々の営みの共通性を探ることには一定の意味があるだろう。

おわりに－本企画展開催の意義

本企画展によって以上のような大型磨製石斧の再評価を行い、展示企図をより一層伝えるための手段として関連イベントを開催しながら大型磨製石斧の価値の普及を試みた。図２に掲げた展示の位置づけと目標について実施結果と比較すると、結果的に考古学ファンを含む多くの県内外の幅広い層に足を運んでいただき、大型磨製石斧を含む石斧の人類史的価値について理解を深めてもらうことができたと思われる。

さらに、石材鑑定による従来の知見の見直しや、磨製石斧が儀器化する背景、諸外国・他地域の磨製石斧との比較、擦切技法の痕跡残置という視点などにより大型磨製石斧を再評価する方向性を示すとともに、美術的観点も付加した展示を行うことができた。

冒頭に掲げた「スタート地点としての企画展」として本展が評価できるかどうかは、今後、以上の成果に基づいた研究と普及が継続されるか否かにかかっている。上掄遺跡出土の大型磨製石斧は、昭和 61 年に当館の所蔵となってから長い年月がたったが、発見半世紀の節目にその価値について広く世に問い、調査研究を継続することによって資料価値の再評価と普及を推進する機運を高めたということが本企画展開催の一つの大きな意義となる。また、考古系展示の門戸をより広い層に対して広げるには、ポスターデザインや展示手法によるイメージの刷新が必要であることと、それと連動して学芸サイドが一般観覧者目線でいかに資料価値や展示をいったん突き放してみられるか、という点が大きいことも本展示を通して明らかとなった。

本企画展でメインとして取り上げた大型磨製石

斧は重要文化財であるが、当館には未指定の貴重な考古資料も多く収蔵されている。今後も展示活動を通した収蔵資料の再評価は積極的に行われるべきであろう。今回はそうした試みの一つであった。展示手法のあり方ついては課題もあったが、学芸サイドと観覧者の隔たりを縮めるべく、さらなる実践的な試みを進めていきたい。

【註】

註（1） 本大型磨製石斧は『日本美術全集』において紹介された（原田編2015）。資料の美術的価値付けのためにはこうした実績を蓄積することも必要だろう。

註（2） かつて大型磨製石斧の出土状態に関する情報を収集する目的で試掘調査が実施された（庄内1999）。その結果、出土層位は黒褐色土層中、出土地点は谷状地形で遺構は確認されず、遺物も少量しか出土しないことから、大型磨製石斧4点のみが「埋納」されたものと推測された。しかし、そこで得られた情報や知見は常設展示などでこれまで積極的に活用されてこなかった。

註（3） バスツアーの魅力としては現地での専門家による解説の他、車内での解説も重要と考える。今回は幸運にも、参加者の一人である国立歴史民俗博物館教授の山田康弘氏にバス車内の解説をお願いし快諾された。博物館発着で現地までは片道２時間半も要したが、職員の車内解説のほか山田氏から往復3時間近くも「縄文時代の子供と老人、葬制」に関する大変わかりやすい講義をしていただき、参加者は最後まで真剣に耳を傾け、質疑も活発になされた。もう一つの魅力はやはり地元の食材を生かした昼食の提供であろう。本ツアーでは地元旅館の協力を得て山菜をふんだんに使った昼食が用意された。

註（4） 盛岡市日戸の大型磨製石斧は緑色岩製であることがすでに指摘されている（齋藤他2006）。

【参考文献】

安蒜政雄　2013 『旧石器時代人の知恵』新日本出版社　227 頁

岩手県文化振興事業団　2013 『下嵐江Ⅰ遺跡・下嵐江Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 608 集　520 頁

小畑弘己　2011 『東北アジア古民族植物学と縄文農耕』同成社　309 頁

木村衡　2001 「地域博物館と考古学―企画展示を例として―」『相模原市立博物館研究報告』第 10 集　67-74 頁

工藤雄一郎・国立歴史民俗博物館編　2014 『ここまでわかった！縄文人の植物利用』新泉社　223 頁

齋藤岳他　2006 「縄文～続縄文時代における北海道中央部から東北地方への緑色・青色片岩製磨製石斧の流通―考古学的・岩石学的検討―」『日本考古学協会第 72 回総会研究発表要旨』日本考古学協会　53 － 56 頁

佐原真　1994 『斧の文化史』UP 考古学選書 6　173 頁

島田和高　1997 「考古学と展示、そして博物館活動―1996 年度明治大学考古学博物館企画展をもとに―」『明治大学博物館研究報告』第 2 号　35-47 頁

庄内昭男　1987 「秋田県東成瀬村上掄遺跡出土の大型磨製石斧」『考古学雑誌』73-1　日本考古学会　64-71 頁

庄内昭男　1999 「東成瀬村上掄遺跡における大型磨製石斧の発見状況」『秋田県立博物館研究報告』第 24 号

中村由克・吉川耕太郎 2016「上掄遺跡出土大型磨製石斧の石材について」『秋田県立博物館研究報告』第 41 号　41-52 頁

原田昌幸編　2015 『日本美術全集 1 縄文・弥生・古墳時代』小学館　311 頁

東成瀬村教育委員会　2012 『菅生田掄・上掄地区に係る遺跡内容確認調査報告書』　60 頁

山田昌久　2014 「『縄文時代』に人類は植物をどのように利用したか」『講座日本の考古学 4 縄文時代　下』泉拓良・今村啓爾編　青木書店　179 － 211 頁

吉川耕太郎　2012 「縄文時代の有肩打製石斧―東北地方北部を中心に―」『季刊考古学』第 119 号　雄山閣　28 － 34 頁

吉川耕太郎　2013 「特別展『アンダー×ワンダー！―北東北の考古学最前線―』展示報告」『秋田県立博物館研究報告』第 38 号　25 － 44 頁

吉川耕太郎　2014 「男鹿」『季刊考古学』第 126 号　雄山閣　83-85 頁

吉川耕太郎　2014 「多様な石器を生み出す石材・頁岩の多目的利用―東北前期と中期末～後期前葉の事例を中心に―」『縄文の資源利用と社会』阿部芳郎編　雄山閣　14-24 頁

吉川耕太郎　2015 「学芸ノート・石斧製作技法の痕跡残置」『秋田県立博物館ニュース』No.161　6 頁
フォーク J.H・ディアーキング L.D　1996 『博物館体験　学芸員のための視点』雄山閣　215 頁
Macgregor. N　2012　A HISTORY OF THE WORLD IN 100 OBJECTS　PENGUIN BOOKS 613p